

今月の逸品

NO.03 2015.06

京都市伏見区深草藤森町1

☎ : 075-644-8840/8175

✉ : manabi@kyokyo-u.ac.jp



水兵服（五十川てい裁縫資料）

1920年~1922年

上着：背丈19cm 背肩幅13.5cm 袖丈16.5cm ズボン：股上13cm 股下8cm
亀岡高等女学校と亀岡高等学校で裁縫を教えた五十川てい（1902~1981）の手になる裁縫雛形。裁縫雛形は、材料の節約、時間の短縮などを目的に、戦前の裁縫教育の中で用いられたミニチュアの裁縫標本で、亀岡高等学校に伝わった「五十川てい裁縫資料」は、五十川自身が東京裁縫女学校高等師範科在学中（1920~1922）に授業の課題として作った裁縫雛形である。この水兵服も実寸法の約2分の1、大きさにして約4分の1の大きさで作られている。紐で結んで着用する上着とズボンから構成されているが、ズボンは横にスリットが入る袴のようなつくりになっており、和服から洋服へと移行する過程をうかがうことができる。また、ズボンの股の部分は開くつくりとなっており、自分でズボンを脱げない男児が、そこから用を足す構成となっている点も興味深い。軍服のひとつである水兵服は、明治時代に男児の洋装に取り入れられ、19世紀末から20世紀初めの日清・日露戦争期に上流階級の間で流行した。実際に着用した様子は、森鷗外の三男、森類氏の写真に見ることができる。



少年に取り入れられたセーラー服
大正4（1915）年 森類氏4歳

増田美子編『日本服飾史』
（東京堂出版、2013年）